翻

刻

本

文

すなる――すといふ（定）
みむ――心みむ（定）

みえつる――
ゝらへつる（定）
みへつる（宮・近）
くしつる（三）

かみなかしも――
かみしなかも（定）
すき――
すき（宮・三）
過（近）

おとこもすなる日記といふものを、ゝむなもしてみむと
てするなり。それのとしのしはすのはつかあまりひと
ひの日のいぬの時に、かどです。そのよし、いさゝかにもの
にかきつく。あるひと、あがたのよとせいつとせはてゝ、れ
いのことどもみなしをへて、げゆなどゝりて、すむたち
よりいでゝ、ふねにのるべき所へわたる。かれこれ、しるし
らぬ、をくりす。としごろよくみえ・つる人〻なむ、別
がたくおもひて、日しきりにとかくしつゝ、のゝしるうち
によふけぬ。
廿二日に、いづみのくにまでと、たひらかに願たつ。ふぢ
はらのときざね、ふなぢなれど、むまのはなむけす。かみなか
しも、ゑひすぎて、いとあやしく、しほうみのほとりにて、

一オ

この人――
このひと（宮・三）
あらさ――
あらす（定）

みっ――
見え（定）
見へ（三）

はちすに――
はちすき（三）

あざれあへり。

廿三日。やぎのやすのりといふひとあり。この人、国にかならずしもいひつかふものにもあらざなり。これぞ、たゝはしきやうにて、むまのはなむけしたる。かみがらにやあらむ、くにひとのこゝろのつねとして、「いまは」とてみつざなるを、こゝろあるものはゝぢずになむにける。これは、ものによりてほむるにしもあらず。

廿四日。講師、むまのはなむけしにいでませり。ありとあるかみしも、わらはまでゑひしれて、一文字をだにしらぬものしが、あしは十文字にふみてぞあそぶ。

廿五日。かみのたちより、よびにふみもてきたなり。よばれていたりて、ひゝとひ、よひとよ、とかくあそぶやうにてあけ

一ウ

たちにて――
たちにてあるに（定）

いていり――
いて（宮・定）

にけり。
廿六日。なをかみのたち※にて、あるじゝのゝしりて、郎等までに、
ものかづけたり。からうた、こゑあげていひけり。やまとうた、
あるじも、まらうとも、こと人もいひあへりけり。から哥は、
これにえかゝず。やまとうた、あるじのかみのよめりける、
都いでゝ君にあはむとこし物をこしかひもなくわかれ
ぬるかなとなむありければ、かへるさきのかみのよめりける、
白妙の浪ぢをとをくゆきかひてわれにゝべきはたれ
ならなくにこと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。
とかくいひて、さきのかみ、いまのも、もろともにおりて、いまのあ
るじも、さきのも、てとりかはして、ゑひごとに心よげなる
ことして、※いでいりにけり。

二オ

ある――する（定）

ある人の――
あるひとの（定）

おもふを――
思ふも（定）
おもへと（近）

廿七日。おほつよりうらどもさしてこぎいづ。かくあるうち
に、京にてうまれたりしをむなご、くにゝてにはかにうせに
しかば、このごろのいでたちいそぎもみれど、なにごとも
いはず。京へかへるに、をむなごのなきのみぞかなしび
こふる。ある人々もえたへず。このあひだに、ある人のかきて
いだせるうた、都へとおもふをものゝかなしきはかへらぬ
人のあればなりけり　また、ある時には、あるものと忘
つゝなをなき人をいづらとゝふぞかなしかりける
いひけるあひだに、かこのさきといふ所に、かみのはらから、
またこと人、これかれ、さけなにともておひきて、いそに
おりゐて、わかれがたきことをいふ。かみのたちの人々のなかに、
このきたる人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめく。かく別

二ウ

がたくいひて、かの人々の、くちあみもゝろはちにて、このうみべにて、になひいだせるうた、おしとおもふ人やとまるとあしがものうちむれてこそわれはきにけれといひてありければ、いといたくめでゝ、ゆく人のよめりける、さをさせどここひもしらぬわたつみのふかき心を君にみるかなといふあひだに、かぢとりものゝあはれもしらで、おのれし酒をくらひつれば、はやくいなむとて「しほみちぬ。風もふきぬべし」とさはげば、ふねにのりなむとす。このをりに、ある人々をりふしにつけて、からうたども、ときにつかはしきいふ。また、ある人、にしぐになれど、かひうたなどいふ。かくうたふに、「ふなやかたのちりもちり、空ゆく雲もたゞよひぬ」とぞいふなる。こよひうらどにとまる。ふぢはらのときざね、

三オ

たちばなのすゑひら、こと人々おひきたり。
廿八日。うらどよりこぎいでゝ、おほみなとをおふ。このあひだに、はやくのかみのこ、やまぐちのちみね、さけ、よき物ども
もてきて、ふねにいれたり。ゆく〳〵のみくふ。
廿九日。おほみなとにとまれり。くすし、ふりはへて、とうそ、白散、さけくはへてもてきたり。心ざしあるにたり。
元日。なをおなじとまりなり。白散をあるもの、「よのま」とて、ふなやかたにさしはさめりければ、かぜにふきならさせて、うみにいれて、えのまずなりぬ。いもじ、あこめも、はがためもなし。かうやうの物なきくになり。もとめしもをかず。たゞおしあゆのくちをのみぞすふ。このすふ人びとのくちを、おしあゆもしおもふやうあらむや。「けふは

三ウ

都のみぞおもひやらるゝ」「こへのかどのしりくべなはの
なよしのかしら、ひゝらぎら、いかにぞ」とぞいひあつなる。
二日。なをおほみなとにとまれり。講師、もの、さけを
こせたり。
三日。おなじ所なり。もし、かぜ浪の、「しばし」とおしむ心や
あらむ、心もとなし。
四日。かぜふけば、えいでたゝず。まさつら、さけ、よき物たて
まつれり。このかうやうにものもてくる人に、なをしも
えあらで、いさゝけわざせさす。ものもなし。にぎはゝしき
やうなれど、まくる心ちす。
五日。風なみやまねば、なをおなじ所にあり。人々たへず
とぶらひにく。

たへ――
。たえ（宮・近・定）

四オ

あをむまを——
　あおむまなと（定）
あひた——ほと（定）

いとをかしかし——
　いともかしこし（定）
　いとおかし（近）
なり——なりけり（定）
なかひつもの——
　なかひつの物（定）
みな人——
みな人〳〵に（定）

六日。きのふのごとし。

七日になりぬ。おなじみなとにあり。けふはあをむまを
おもへど、かひなし。たゞ浪のしろきのみぞみゆる。かゝるあ
ひだに、人のいへの、いけとなある所より、こひはなくて、ふな
よりはじめて、かはのもうみのも、こともものども、ながびつに
になひつゞけておこせたり。わかなぞけふをばしらせたる。
うたあり。そのうた、あさぢふの野べにしあれば水もな
きいけにつみつるわかなゝりけり　いとをかしかし。
このいけといふは、所の名なり。よき人のおとこにつきて
くだりて、すみけるなり。このながびつ・ものは、みな人、わ
らはまでにくれたれば、あきみちて、ふなこどもははらつ
づみをうちて、うみをさへおどろかして、浪たてつべし。

四ウ

かくて、このあひだにことおほかり。けふ、わりごもたせてき
たる人、そのなゝどぞや、いまおもひいでむ。この人、哥よまむ
とおもふ心ありてなりけり。とかくいひ〳〵て、「なみのたつなる
こと」ゝをるへいひて、よめるうた、ゆくさきにたつしら波
のこゑよりもをくれてなかむわれやまさらむとぞよめる。
いとおほごゑなるべし。もてきたる物よりは、うたはいかゞあらむ。
このうたをこれかれあはれがれども、ひとりもかへしせず。
しつべき人もまじれゝど、これをのみいたがり、ものを
のみくひて、よふけぬ。このうたぬし、「まだまからず」といひて
たちぬ。ある人のこのわらはなる、ひそかにいふ。「まろ、このうた
のかへしせむ」といふ。おどろきて、「いとおかしき事かな。
よみてむやは。よみつべくは、はやいへかし」といふ。『まか

五オ

ありけん――
ナシ（定）

おむなおきなてをしつへし――
おむなをきなにをしつへし（定）
おもなおきなてをしつへし（近）

らず』とてたちぬる人をまちてよまむ」とてもとめけ
るを、「よふけぬ」とにやありけむ、やがていにけり。「そも〳〵
いかゞよむだる」と、いぶかしがりてとふ。このわらは、さすがに
はぢていはず。しゐてとへば、いへるうた、ゆく人もとまる
も袖のなみだがはみぎはのみこそぬれまさりけれと
なむよめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、
いとおもはずなり。「わらはごとにてはなにかはせむ。おむ
なおきな、てをしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、た
よりあらばやらむ」とて、おかれぬめり。
八日。さはる事ありて、なをおなじ所なり。こよひ、月
はうみにぞいる。これをみて、なりひらの君の、「山のは
にげていれずもあらなむ」といふうたなむおもほゆる。もし、

五ウ

12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

うみにも——
海には（三）

うみべにてよまゝしかば、「なみたちさへていれずもあらなむ」ともよみてましや。いま、このうたをおもひいでゝ、ある人のよめりける、てる月のながるゝみればあまの河

いづるみなとはうみにざりけるとや。

九日のつとめて、おほみなとより「なはのとまりをおはむ」とて、こぎいでけり。これかれたがひに、「くにのさかひのうちは」とてみをくりにくる人あまたがなかに、藤はらのときざね、たちばなのすゑひら、はせべのゆきまさらなむ、みたちよりいでたうびしひより、こゝかしこにおひくる。この人々ぞ心ざしある人なりける。この人々のふかき心ざしは、このうみにもおとらざるべし。※これよりいまはこぎはなれてゆく。これをみをくらむとてぞ、この人どもはおひきける。

六オ

みえ――
みへ（三）
見え（定）

かよふ――
かふ（定・近）

かくてこぎゆくまに〳〵、うみのほとりにとまれる人
もとほくなりぬ。ふねの人もみえずなりぬ。きしにもいふ
ことあるべし。ふねにもおもふことあれど、かひなし。かゝれど
このうたもひとりごとにしてやみぬ。おもひやる心は
うみをわたれどもふみしなければしらずやあるらむかくて、
宇多のまつばらをゆきすぐ。そのまつのかずいくそ
ばく、いくちとせへたりとしらず。もとごとに浪うち
よせ、えだごとにつるぞとびかよふ。おもしろしとみる
にたへずして、ふなびとのよめるうた、みわたせばまつ
のうれにときすむつるはちよのどちとぞおもふべらな
るとや。このうたは、ところをみるに、えまさらず。かくある
をみつゝこぎゆくまに〳〵、やまもうみもみなくれ、よふ

六ウ

みえ――
みへ（三）
見え（定）

けて、にしひむがしもみえずして、ゝけのこと、かぢとり
の心にまかせつ。おのこもならはぬは、いともこゝろぼそ
し。まして、をむなはふなぞこにかしらをつきあてゝ、
ねをのみぞなく。かくおもへば、ふなこ、かぢとりはふなう
たうたひて、なにともおもへらず。そのうたふうたは、
はるのゝにてぞねをばなく。わかすゝきに、てきるゝゝ
へむだるなを、おやゝまぼるらむ、しうとめやくふらむ。
かつらや。よむべのうなゐもがな、ぜにこはむ。そらご
とをして、おぎのりわざをして、ぜにもゝてこず、おの
れだにこず。これならずおほかれども、かゝず。これらを
人のわらふをきゝて、うみはあるれども、心はすこしなぎ
ぬ。かくゆきくらして、とまりにいたりて、おきなびと

七オ

みえ――
みへ（宮）
見え（定）

ひとり、たうめひとり、あるがなかにこゝちあしみ
して、ものもゝのしたばで、ひそまりぬ。
十日。けふは、このなはのとまりにとまりぬ。
十一日。あかつきにふねをいだして、むろへをおふ。
ひとみなまだねたれば、うみのありやうもみえず。
たゞつきをみてぞ、にしひむがしをばしりける。かゝる
あひだに、みなよあけて、手あらひ、れいのことゞもして、
ひるになりぬ。いまし、はねといふところにきぬ。わかき
わらは、この所のなをきゝて、「はねといふところは、とり
のはねのやうにやある」といふ。まだおさなきわらは
のことなれば、ひとゞわらふときに、ありけるをむな
わらはなむ、この[う]たをよめる、まことにてなにきく

七ウ

12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

むかしへひと――
むかしの人（定）
むかしっ人（三）

所はねならばとぶがごとくにみやこへもがなとぞいへる。
おとこもをむなも、「いかで、とく京へもがな」とおもふ心あれば、このうたよしとにはあらねど、「げに」とおもひて、ひとぐくわすれず。このはねといふところとふわらはのつゐでにぞ、また、むかしへびとをおもひいでゝ、いづれのときにかわするゝ。けふは、ましてはゝのかなしがらるることは、くだりしときの人のかずたらねば、ふるうたに、「かずはたらでぞかへるべらなる」といふことを思ひいでゝ、人のよめる、よのなかにおもひやれどもこをこふるおもひにまさるおもひなきかなといひつゝなむ。
十二日。あめふらず。ふむとき、これもちがふねのをくれたりし、ならしづよりむろつにきぬ。

八オ

とうか――とをか
青・日・宮・近・定・三ノ諸本ミナ「とうか」トス。今、私ニ「とをか」ト訂ス。

十三日のあかつきに、いさゝかにあめふる。しばしありてやみぬ。をむなこれかれ、ゆあみなどせむとて、あたりのよろしき所(ところ)におりてゆく。うみをみやれば、くもゝみな波(なみ)とぞみゆるあまもがないづれかうみととひてしるべくとなむうたよめる。さて、※とうかあまりなれば、つきおもしろし。ふねにのりはじめしひより、ふねにはくれなゐこく、よきゝぬきず。それは「うみのかみにおぢて」といひて、なにのあしかげにことづけて、ほやのつまのいずし、すしあはびをぞ、こゝろにもあらぬはぎにあげてみせける。

十四日。あかつきよりあめふれば、おなじところにとまれり。ふなぎみ、せちみす。さうじものな・(○け)れば、むまときよ

八ウ

しはゝゝ――
なと（定）

りのちに、かぢとりのきのふつりたりしたひに、ぜに
なければ、よねをとりかけて、おちられぬ。かゝることな
ほありぬ。かぢとり、またゝひもてきたり。よね、さけ、し※
ばゝくくる。かぢとり、けしきあしからず。
十五日。けふ、あづきがゆにず。くちおしく、なほひのあ
しければ、ゐざるほどにぞ、けふ、はつかあまりへぬる。
いたづらにひをふれば、人々うみをながめつゝぞある。めのわ
らはのいへる、たてばたつゐればまたゐるふくかぜになみ
とはおもふどちにやあるらむ　いふかひなきものゝいへるに
は、いとにつかはし。
十六日。かぜなみやまねば、なほおなじ所にとまれり。
たゞ、「うみになみなくして、いつしかみさきといふところ

九オ

12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

わたらむ」とのみなむおもふ。かぜなみ、とにゝやむべくもあ
らず。あるひとの、このなみたつをみてよめるうた、しもだに
もをかぬかたぞといふなれどなみのなかにはゆきぞふりける
さて、ふねにのりしひよりけふまでに、はつかあまりいつかに
なりにけり。
十七日。くもれるくもなくなりて、あかつきづくよいとも
おもしろければ、ふねをいだしてこぎゆく。このあひだに、
くものうへもうみのそこもおなじごとくになむありける。
むべも、むかしのおとこは、「さをはうがつ、なみのうへの月を。
ふねはおそふうみのうちのそらを」とはいひけむ。きゝされ
にきけるなり。また、ある人のよめるうた、みなそこのつき
のうへよりこぐふねのさをにさはるはかつらなるらし

九ウ

おもほえ――
おもほへ（三）

としつきを――
年月を（定）
とし月を（近）

これをきゝて、あるひとのまたよめる、かげみればなみの
そこなるひさかたのそらこぎわたるわれぞわびしきか
くいふあひだに、よやうやくあけゆくに、かぢとりら、「く
ろきくもにはかにいできぬ。かぜふきぬべし。みふねかつ
してむ」といひて、ふねかへる。このあひだにあめふりぬ。
いとわびし。
十八日。なほおなじ所にあり。うみあらければ、ふねいださ
ず。このとまり、とほくみれども、ちかくみれども、いとおも
しろし。かゝれどもくるしければ、なにごともおもほえず。
おとこどもは、心やりにやあらむ、からうたなどいふべし。
ふねもいださでいたづらなれば、ある人のよめる、いそぶりの
よするいそにはとしつきをいつともわかぬゆきのみぞふる

十オ

つねせぬ――
つきせぬ（宮・近・三）

つきひころ――
つきころ（三）
月ころ（定）
かせそ――かせに（三）

よみすゑ――
よみすへ（定）
よみあへ（近）
よみあゑ（宮・三）
いひ――かくいひ（定）

このうたは、※つね・せぬ○にひとのことなり。また、ひとのよめる
かぜによるなみのいそにはうぐひすもはるもえしらぬ
はなのみぞさくこのうたどもをすこしよろしときゝて、
※ふねのをさしけるおきな、※つきひごろのくるしき心（こゝろ）
やりによめる、たつなみをゆきかはなかとふく※かぜぞよせ
つゝひとをはかるべらなるこのうたどもをひとのなにかとい
ふを、あるひときゝふけりてよめり。そのうた、よめるも
じ、みそもじあまりなゝもじ。ひとみな、えあらでわらふ
やうなり。うたぬし、いとけしきあしくてえず○あ。まねべ
ども、えまねばず。かけりとも、※えよみすゑがたかるべし。
けふだに※いひがたし。ましてのちにはいかならむ。
十九日。ひあしければ、ふねいださず。

十ウ

くにひと（宮・三）――
くに人（定）
国人（近）

くにゝ――くには（定）

廿日。きのふのやうなれば、ふねいださず。みなひとゞゝうれ
へなげく。ゝるしくこゝろもとなければ、たゞひのへぬるか
ずを、「けふいくか」、「はつか」、「みそか」とかぞふれば、およびも
そこなはれぬべし。いとわびし。よるはいもねず。はつかのよの
つきいでにけり。やまのはもなくて、うみのなかよりぞいで
くる。かうやうなるをみてや、むかし、あべのなかまろといひ
けるひとは、もろこしにわたりて、かへりき・けるときに、ふね
にのるべきところにて、かのくに・ひと、むまのはなむけし、
わかれおしみて、かしこのからうたつくりなどしける。あか
ずやありけむ、はつかのよのつきいづるまでぞありける。
そのつきは、うみよりぞいでける。これをみてぞ、なかまろ
のぬし、「わがくにゝかゝるうたをなむ、かみよゝりかみ

十一オ

おもほへ――
。おもほえ（近・定）

もよむたび、いまはかみなかしものひとも、かうやう
にわかれ○をおしみ、よろこびもあり、かなしびもあるとき
にはよむ」とて、よめりけるうた、あをうなばらふりさけ
みればかすがなるみかさのやまにいでしつきかもとぞよ
めりける。○かこのくにひと、きゝしるまじくおもほへたれ
ども、ことの心○こゝろを、○おゝとこもじに、さまをかきいだして、こゝの
ことばつたへたるひとにいひしらせければ、こゝろをや
きゝえたりけむ、いとおもひのほかになむめでける。もろ
こしとこのくにとは、ことことなるものなれど、つきのかげは
おなじことなるべければ、ひとの心○こゝろもおなじことにやあらむ。
さていま、そのかみをおもひやりて、あるひとのよめるう
た、みやこにてやまのはにみしつきなれど波○なみよりいでゝ

十一ウ

ふね歌――
ふね字落歌（青）
。ふね（定）
ふ（三）

なみにこそいれ

廿一日。うのときばかりにふねいだす。みなひとゞゝのふ※ね歌
いづ。これをみれば、はるのうみに、あきのこのはしも
ちれるやうにぞありける。おぼろけの願によりてにや
あらむ、かぜもふかず、よきていできて、こぎゆく。このあ
ひだに、つかはれむとて、つきてくるわらはあり。それがうた
うふなうた、なをこそくにのかたはみやらるれ、わがちゝ
はゝありとしおもへば。かへら・や。とうたふぞあはれなる。かく
うたふをきゝつゝこぎくるに、くろとりといふとり、いは
のうへにあつまりをり。そのいはのもとに、なみしろくう
ちよす。かぢとりのいふやう、「くろとりのもとに、しろ
きなみをよす」とぞいふ。このことば、なにとにはなけれども、

十二オ

きこへ――
。きこえ（定・近）

むくゐ――むくい
青・日・宮・近・定・三ノ諸本、何レモ「むくゐ」トス。今、私ニ「むくい」ト訂ス。

まに――
まゝに（定）
ナシ（近）

ものいふやうこぞきこへたる。ひとのほどにあはねば、とがむるなり。かくいひつゝゆくに、ふなぎみなるひと、なみをみて、「くによりはじめて、かいぞくむくゐせむといふなることをおもふうへに、うみのまたおそろしければ、かしらもみなしらけぬ。ななそぢやそぢは、うみにあるものなりけり。わがかみのゆきといそべのしらなみといづれまされりおきつしまもりかぢとり、いへ」

廿二日。よむべのとまりより、ことゝまりをおひてゆく。はるかにやまみゆ。としこゝのつばかりなるをのわらは、としよりはをさなくぞある。このわらは、ふねをこぐまに：やまもゆくとみゆるをみて、あやしきこと、うたをぞよめる。そのうた、こぎてゆくふねにてみればあしひきのやま

十二ウ

さへゆくをまつはしらずやとぞいへる。おさなきわらはの
ことにては、につかはし。けふ、うみあらげにて、いそにゆき
ふり、なみのはなさけり。あるひとのよめる、なみとのみ
ひとへにきけどいろみればゆきとはなとにまがひける
かな
廿三日。ひてりて、くもりぬ。「このわたり、かいぞくのおそり
あり」といへば、かみほとけをいのる。
廿四日。きのふのおなじところなり。
廿五日。かぢとりこの、「きたかぜあし」といへば、ふねいださず。
「かいぞくおひく」といふこと、たへずきこゆ。
廿六日。まことにやあらむ、「かいぞくおふ」といへば、よなかば
かりよりふねをいだして、こぎくるみちに、たむけする

十三オ

あひた――
ほと（定）

をむな――
おきな（定）
女（近）

ふねの――
舟も（定）
つけてつゝ――
。つけて（定）

ところあり。かぢとりしてぬさたいまつらするに、ぬさの
ひむがしへちれば、かぢとりのまうしてたてまつることは、
「このぬさのちるかたに、みふねすみやかにこがしめたまへ」
とまうしてたてまつる。これをきゝて、あるめのわらはのよ
める、わたつみのちふりのかみにたむけするぬさのおひ
かぜやまずふかなむとぞよめる。このあひだに、※かぜのよ
ければ、かぢとりいたくほこりて、「ふねにほあげ」などよろ
こぶ。そのをとをきゝて、わらはもを※むなも、いつしかとしお
もへばにやあらむ、いたくよろこぶ。このなかに、あはぢのたう
めといふひとのよめるうた、おひかぜのふきぬるときはゆ
く※ふねのほてうちてこそうれしかりけれとぞ。ていけ
のことに※つけてつゝいのる。

十三ウ

たへ（宮・定・三）——
。たえ（近）

いとなかくなりにたるを——
なかくなるを（定）
いとなかくなかくなりにたるを
（三）

ひとを——
。月を（定）
。ひを（宮・三）

廿七日。かぜふき、なみあらければ、ふねいださず。これかれかしこくなげく。○をおとこたちのこゝろなぐさめに、からうたに、「日をのぞめばみやことほし」などいふなることのさまをきゝて、あるをむなのよめるうた、ひをだにもあまぐもちかくみるものをみやこへとおもふみちのはるけさまた、あるひとのよめる、ふくかぜのたへぬかぎりしたちくればなみぢはいとゞはるけかりけりひゝとひ、かぜやまず。つまはじきしてねぬ。

廿八日。よもすがらあめやまず。けさも。

廿九日。ふねいだしてゆく。うらゝゝとてりて、こぎゆく。つめのいとながくなりにたるをみて、ひとをかぞふれば、けふは子日なりければ、きらず。むつきなれば、京

十四オ

いとこ――
いつこ（定）

のねのひのことひいでゝ、「こまつもがな」といへど、うみなか
なれば、かたしかし。あるをむなのかきていだせるうた、
おぼつかなけふはねのひかあまならばうみまつをだにひ
かましものをとぞいへる。うみにて、子日のうたにては、い
かゞあらむ。また、あるひとのよめるうた、けふなれどわかな
もつまずかすがのゝわがこぎわたるうらになければ
かくいひつゝこぎゆく。おもしろきところにふねをよせて
「こゝやいどこ」とゝひければ、「とさのとまり」といひけり。む
かし、とさといひけるところにすみけるをむな、このふね
にまじれりけり。そがいひけらく、「むかし、ゝばしあり
しところのなくひにぞあなる。あはれ」といひて、よめる
うた、としごろをすみしところのなにしおへばきよる

十四ウ

よるあるき――
よるありき（定）
みへ――
。見え（定）
。みえ（宮・近）

なみをもあはれとぞみるとぞいへる。
卅日。あめかぜふかず。「かいぞくはよるあるきせざなり」※
ときゝて、よなかばかりにふねをいだして、あはのみとを
わたる。よなかなれば、にしひむがしもみへず。おとこをむな、※
からくかみほとけをいのりて、このみとをわたりぬ。とらう
のときばかりに、ぬしまといふところをすぎて、たなかは
といふところをわたる。からくいそぎて、いづみのなだといふ
ところにいたりぬ。けふ、うみになみにゝたるものなし。かみほ
とけのめぐみかうぶれるにゝたり。けふ、ゝねにのりしひ
よりかぞふれば、みそかあまりこゝぬかになりにけり。
いまは、いづみのくにゝきぬれば、かいぞくものならず。
二月一日。あしたのま、あめふる。むまときばかりにやみぬれば、

十五オ

いづみのなだといふところよりいでゝこぎゆく。うみのう
へ、きのふのごとくに、かぜなみゝへず。くろさきのまつば
らをへてゆく。ところのなはくろく、まつのいろはあをく、
いそのなみはゆきのごとくに、かひのいろはすはうに、
五色にいまひといろぞたらぬ。このあひだに、けふは・この
うらといふところよりつなでひきてゆく。かくゆくあひ
だに、あるひとのよめるうた、たまくしげはこのうらなみ
たゝぬ日はうみをかゞみとたれかみざらむまた、ふなぎみ
のいはく、「このつきまでなりぬること」ゝなげきて、くるしき
にたへずして、「ひともいふこと」ゝて、こゝろやりにいへる、
ひくふねのつなでのながきはるのひをよそかいかまでわ
れはへにけりきくひとのおもへるやう、「なぞ、たゞごとなる」

十五ウ

かせ――猶（定）

かせの――風の（近・定・三）

と、ひそかにいふべし。「ふなぎみのからくひねりいだして、
よしとおもへることを。ゑじもこそしたべ」とて、つゝめきてや
みぬ。にはかにかぜなみたかければ、とゞまりぬ。
二日。あめかぜやまず。ひゝとひ、よもすがら、かみほとけを
いのる。
三日。うみのうへきのふのやうなれば、ふねいたさず。かぜ
のふくことやまねば、きしのなみたちかへる。これにつけて
よめるうた、をゝよりてかひなきものはおちつもるな
みだのたまをぬかぬなりけりかくてけふくれぬ。
四日。かぢとり、「けふ、かぜくものけしきはなはだあし」
といひて、ふねいださずなりぬ。しかれども、ひねもすにな
みかぜたゝず。このかぢとりは、ひもえはからぬかたゐ

十六オ

うるわしき――
うるはしき（近・定）

しゝこ――
しゝしこ（宮）

なりけり。このとまりのはまには、くさ〴〵のうるわしき※
かひ、いしなどおほかり。かゝれば、たゞむかしのひとをのみ
こひつゝ、ふねなるひとのよめる、よするなみうちもよせ
なむわがこふるひとわすれがいおりてひろはむといへれば、
あるひとのたへずして、ふねのこゝろやりによめる、わすれ
がいひろいしもせじしらたまをこふるをだにもかた
みとおもはむとなむいへる。をむなごのためには、おやをさ
なくなりぬべし。「たまならずもありけむを」とひといはむ
や。されども、「※しゝこ、かほよかりき」といふやうもあり。なほ
おなじところにひをふることをなげきて、あるをむなの
よめるうた、てをひてゝさむさもしらぬいづみにぞくむ
とはなしにひごろへにける

十六ウ

おほせ――
ナシ（近）

五日。けふ、からくして、いづみのなだよりをづのとまり
をおふ。まつばら、めもはるゞゝなり。これかれ、くるしければ
よめるうた、ゆけどなほゆきやられぬはいもがうむをづ
のうらなるきしのまつばらかくいひつゝくるほどに、「ふ
ねとくこげ。ひのよきに」ともよほせば、かぢとり、ふなこ
どもにいはく、「みふねよりおほせたぶなり。あさきたの
いでこぬさきに、つなではやひけ」といふ。このことばのうた
のやうなるは、かぢとりのおのづからのことばなり。かぢとり
は、うつたへに、われうたのやうなることいふとにもあらず。
きくひとの、「あやしく、うためきてもいひつるかな」とて、か
きいだせれば、げにみそもじあまりなりけり。「けふ、なみ
なたちそ」と、ひとゞゝひねもすにいのるしるしありて、

※○ふ

十七オ

かもめ――かもも（三）

いしへ――
。いしづ（定・三）

むかしへひと――
むかしつひと（三）

かぜなみたゝず。いまし、かもめむれゐてあそぶところ
あり。京のちかづくよろこびのあまりに、あるわらはのよ
めるうた、いのりくるかざまともふをあやなくもかも
めさへだになみとみゆらむといひてゆくあひだに、※いしへと
いふところのまつばらおもしろくて、はまべとほし。また、
すみよしのわたりをこぎゆく。あるひとのよめるうた、
いまみてぞみをばしりぬるすみのえのまつよりさき
にわれはへにけりこゝに※むかしへびとのはゝ、ひとひかたと
きもわすれねばよめる、すみのえにふねさしよせよ
わすれぐさしるしありやとつみてゆくべくとなむ。うつた
へに※わすれなむとにはあらで、こひしきこゝちしばし
やすめて、またもこふるちからにせむとなるべし。かく

十七ウ

たいまつれゝとも——
たいまつれと（定）
たてまつれゝ共（近）
たいまつれとも（宮）

いひてながめつゝくるあひだに、ゆくりなくかぜふきて、こ
げども〳〵、しりへしぞきにしぞきて、ほとゝゝしくう
ちはめつべし。かぢとりのいはく、「このすみよしの明神
は、れいのかみぞかし。ほしきものぞおはすらむ」とは、い
まめくものか。さて、「ぬさをたてまつりたまへ」といふ。いふに
したがひて、ぬさたいまつる。かくたいまつれゝども、もはら
かぜやまで、いやふきに、いやたちに、かぜなみのあやふけ
れば、かぢとりまたいはく、「ぬさにはみこゝろのいかねば、
みふねもゆかぬなり。なほ、うれしとおもひたぶべきも
のたいまつりたべ」といふ。また、いふにしたがひて、「いかゞは
せむ」とて、「まなこもこそふたつあれ。たゞひとつあるかゞ
みをたいまつる」とて、うみにうちはめつればくちをし。

十八オ

なりけり――
なり（近・定）

おむな――
をんな（定）
女（近）

されば、うちつけに、うみはかゞみのおもてのごとなりぬ
れば、あるひとのよめるうた、ちはやぶるかみのこゝろ
をあるゝうみにかゞみをいれてかつみつるかないた・すみ
のえ、はすれぐさ、きしのひめまつなどいふかみにはあら
ずかし。めもうつら〳〵、かゞみにかみのこゝろをこそはみ
つれ。かぢとりのこゝろは、かみのみ心なりけり。
六日。みおつくしのもとよりいでゝ、なにはにつきて、かは
じりにいる。みなひとゞゝ、おむな、おきな、ひたひにて
をあてゝよろこぶことふたつなし。かのふなゑひのあは
ぢのしまのおほいご、「みやこちかくなりぬ」といふをよろこ
びて、ふなぞこよりかしらをもたげて、かくぞいへる。
いつしかといぶせかりつるなにはがたあしこぎそけてみ

十八ウ

ふねきにけりいとおもひのほかなる人のいへれば、ひとゞゝ
あやしがる。これがなかに、こゝちなやむふなぎみ、いたくめ
でゝ、「ふなゑひしたうべりしみかほには、にずもあるかな」
といひける。
七日。けふ、かはじりにふねいりたちて、こぎのぼるに、かは
のみづひて、なやみわづらふ。ふねのゝぼることいとかたし。
かゝるあひだに、ふなぎみの病者、もとよりこちゞ〳〵
しきひとにて、かうやうのこと、さらにしらざりけり。
かゝれども、あはぢたうめのうたにめでゝ、みやこほこり
にもやあらむ、からくして、あやしきうたひねりいだ
せり。そのうたは、きときてはかはのぼりぢのみづを
あさみふねもわがみもなづむけふかなこれは、やまひ

十九オ

をすればよめるなるべし。ひとうたにことのあかねば、
いまひとつ、とくとおもふふねなやますはわがために
みづのこゝろのあさきなりけりこのうたは、みやこちか
くなりぬるよろこびにたへずして、いへるなるべし。あ
はぢのごのうたにおとれり。「ねたき。いはざらましも
のを」とくやしがるうちに、よるになりてねにけり。
八日。なほかはのぼりになづみて、とりかひのみまきといふ
ほとりにとまる。こよひ、ふなぎみ、れいのやまひおこりて、
いたくなやむ。あるひと、あざらかなるものもてきたり。よね
してかへりごとす。おとこどもひそかにいふなり。「いひぼし
てもつゝる」とや。かうやうのこと、ゝころゞゝにあり。けふ、せち
みすれば、いを不用。

十九ウ

九日。こゝろもとなさに、あけぬから、ふねをひきつゝのぼ
れども、かはのみづなければ、ゐざりにのみぞゐざる。この
あひだに、わだのとまりのあかれのところといふ所(ところ)あり。
よね、いをなどこへば、おこなひつ。かくてふねひきのぼる
に、なぎさの院といふところをみつゝゆく。その院、むかし、○を
おもひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。しり
へなるお○をかには、まつのきどもあり。なかのにはには、むめ
のはなさけり。こゝにひとゞくのいはく、「これ、むかしなだ
かくきこへたるところなり。故これたかのみこのおほむ
ともに、故ありはらのなりひらの中将の、『よのなかに
たへてさくらのさかざらばゝるのこゝろはのどけ
からまし』といふうたよめるところなりけり」。いま、けふ

きこへ——
。きこえ（近）

たへ——
。たえ（近・宮）

二十オ

ところ――
所（近・定）

あるひと、※ところにゝにたるうたよめり。ちよへたるまつには
あれどいにしへのこゑのさむさはかはらざりけりまた、
あるひとのよめる、きみこひてよをふるやどのむめの
はなむかしのかにぞなほにほひけるといひつゝぞ、み
やこのちかづくをよろこびつゝのぼる。かくのぼるひと〳〵
のなかに、京よりくだりしときに、みなひと、子どもなかり
き。いたれりしくにゝてぞ、子うめるものどもありあ
へる。ひとみな、ふねのとまるところへ、○にこをいだきつゝお
りのりす。これをみて、むかしのこのはゝ、かなしきに
たへずして、なかりしもありつゝかへるひとのこをあり
しもなくてくるがゝなしさといひてぞなきける。ちゝ
もこれをきゝて、いかゞあらむ。かうやうのこともうたも、

二十ウ

このむとてあるにもあらざるべし。もろこしも
こゝも、おもふことにたへぬときのわざとり。（か）（か歟）こよひ、う
どのといふところにとまる。
十日。さはることありて、のぼらず。
十一日。あめいさゝかにふりて、やみぬ。かくてさしのぼるに、
ひむがしのかたに、やまのよこほれるをみて、ひとにと
へば、「やはたのみや」といふ。これをきゝてよろこびて、ひと
びとをにがみたてまつる。やまざきのはしみゆ。うれし
きことかぎりなし。こゝに、相應寺のほとりに、し
ばしふねをとゞめて、とかくさだむることあり。このて
らのきしほとりに、やなぎおほくあり。あるひと、こ
のやなぎのかげの、□（か）はのそこにうつれるをみてよめ

二十一オ

とまれり――
あり（定）

るうた、さゞれなみよするあやをばあをやぎのかげ
のいとしておるかとぞみる
十二日。やまざきにとまれり。※
十三日。なほやまざきに。
十四日。あめふる。けふ、くるま、京へとりにやる。
十五日。けふ、くるまゐてきたり。ふねのむつかしさに、
ふねよりひとのいへにうつる。このひとのいへ、よろこべる
やうにて、あるじゝたり。このあるじの、またあるじのよ
きをみるに、うたておもほゆ。いろ〳〵にかへりごとす。
いへのひとのいでいり、にくげならず、ゐやゝかなり。
十六日。けふのようさつかた、京へのぼるついでにみれ
ば、やまざきのこびつのゐも、まがりのおほぢのかた

二十一ウ

くる――
かへる（定）

もかはらざりけり。「うりびとのこゝろをぞしらぬ」
とぞいふなる。かくて京へいくに、しまさかにて、ひと、ある
じゝたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちて
ゆきしときよりは、※くるときぞひとはとかくあり
ける。これにもかへりごとす。よるになして京へはい※○に
らむとおもへば、いそぎしもせぬほどに、つきいでぬ。
かつらがは、つきのあかきにぞわたる。ひとぐ〳〵のいはく、
「このかは、あすかゞはにあらねば、ふちせさらにかはら
ざりけり」といひて、あるひとのよめるうた、ひさかた
のつきにおひたるかつらがはそこなるかげもかはらざり
けりまた、あるひとのいへる、あまぐものはるかな
りつるかつらがはそでをひてゝもわたりぬるかな

二十二オ

また、あるひとよめり。かつらがはわがこゝろにも
かよはねどおなじふかさにながるべらなり京の
うれしきあまりに、うたもあまりぞおほかる。よふけ
てくれば、ところ〴〵もみへず。京にいりたちてうれ
し。いへにいたりて、かどにいるに、つきあかければ、いと
よくありさまみゆ。きゝしよりもまして、いふかひ
なくぞこぼれやぶれたる。いへにあづけたりつるひとの
こゝろも、あれたるなりけり。なかゞきこそあれ、ひとつ
いへのやうなれば、のぞみてあづかれるなり。さるは、たよ
りごとに、ものもたへずえさせたり。こよひ、「かゝること」ゝ
こわだかにものもいはせず。いとはつらくみゆれど、
こゝろざしはせむとす。さて、いけめいてくぼまり、

みへ――
。みえ（近・三）

たへす――たえす
青・日・宮・近・定・三ノ諸本「ミナ「たへす」トス。今、私ニ「たえす」ト訂ス。

二十二ウ

みづゝけるところあり。ほとりにまつもありき。いつ
とせむとせのうちに、千とせやすぎにけむ、かたへ
はなくなりにけり。いまおひたるぞまじれる。おほ
かたのみなあれにたれば、「あはれ」とぞひとゞゝいふ。
おもひいでぬことなく、おもひこひしきがうちに、
このいへにてうまれしをむなごのもろともにかへ
らねば、いかゞはかなしき。ふなびともみな、こたか
りてのゝしる。かゝるうちに、なほかなしきにたへず
して、ひそかにこゝろしれるひとゝいへりけるうた、
むまれしもかへらぬものをわがやどにこまつのあるを
みるがゝなしさとぞいへる。なほあかずやあらむ、また
かくなむ。みしひとのまつのちとせにみましかば

二十三オ

とほくかなしきわかれせましやわすれがたく、ゝち（く）

をしきことおほかれど、えつくさず。とまれかうまれ、

とくやりてむ。

二十三ウ

3　2　1

本云

此一冊依　仰以貫之自筆

本不違一字令書写之及数

反改誤者也

延徳二年四月廿日

権大納言宗綱

二十四オ

申出　御本仮名遣以下不違一
字書写之畢
于時慶長五年庚子暦孟春下澣日

二十四ウ